



「待降節の日々」

後援会長 徳野昌博

この機関誌がお手許に届くのは、教会の暦の「待降節」のころかと思います。

今年の場合、「待降節」は11月27日に始まり、「待降節」とは教会の暦の新年にあたります。

一般の暦では元日、1月1日が新年のスタートですが、教会はそれよりも一足早く、と言いますか、一ヶ月近く早く新年を迎えるのです。

多くのルーテル教会では、待降節になると、四本のろうそくを立てた「アドヴェント・クラッツ」を礼拝堂に飾ります。四本のろうそくはクリスマスに至る四回の日曜日を意味しています。待降節最初の日曜日を皮切りに、一本ずつ灯をともし、四本すべてのろうそくに灯がともった、その週にクリスマスを迎えます。その日を指折り数えて待つのです。その点では、「アドヴェント・カレンダー」も同じねらいがあります。待降節は、クリスマスを、救い主イエス様の到来を指折り数えて待つ日々なのです。「もういくつ寝ると…」、あれです。

待降節の日々だけではなく、人生においても、待つことの大切さを思います。生き物が成長するには時間がかかります。動物がそうです。わけても人間は…。そして、花や野菜もそうでしょう。待つことが強いられ、忍耐することが必要です。しかし、イエス様は約束してくださいました。「最後まで耐え忍ぶ者は救われる」と。

待って、待って、なお待つこと、最後まで忍耐すること。これを可能にするのは、やはり、愛だと思います。赤ちゃんを育てるお母さんは、我が子の成長を楽しみにしています。どんなに時間がかかろうと、手間がかかろうと、お母さんにとって、それは苦痛ではないでしょう。「まんねり」にもなりません。なぜなら、そこに愛があるからです。私たちも、愛を持って待ちたいと思います。それは「待ちつつ、望みつつ」ということです。

でも、お年寄りからは、「もう、私には死以外、待つべきものは何もない」と言われそうです。そうかもしれませんが…。『人間を見つめて』の著者、神谷美恵子さんが、死に直面した人間の心をいちばん苦しめるものの一つが、「果たして自分の人生に意味があったか」ということであると言っておられました。そうだとすると、現実に死に直面した時に、そのことを思い巡らし、考えても、実際にはもう遅いわけです。そのうち、そうなった時に考えるのではなく、今日という日、一日一日を生かされていることを喜び、感謝し、大切に過ごそうではありませんか。一人ががんばってそうするのではなく、みんなで支えられて、支え合って、です。

私たち一人ひとりの今を支え、生かしてくださっている神様は、死を超えてなお、私たちと共におられるのです。すべてを主なる神様におゆだねして、平安のうちに生きていこうではありませんか。

「河内キリシタンの喜びと悲しみ」-1-

ケアハウスるうてる 中山和子

私は自分の老後をケアハウスで送ろうと
思っていました。クリスチャンである私に
は日曜日に礼拝がある「るうてるホーム」
は、魅力的でした。65才の時に申し込みま
しましたが、当時はなかなか入居出来ず、私の
番になったのは10年後でした。教会の人に
「四條畷はクリスチャン発祥の地ですね」
と言われ、びっくりしたのです。そんなこ
とは誰からも聞いたことがなかったのです。
そのうちに教会の女性会の方から、この地
を案内してほしいと言われ、それには何か
手引書があった方がよいと思い、次のよう
なものを作ってみました。それは「河内キ
リシタンの発生」についてでした。

まず、最初に登場してきますのは「盲目
の琵琶法師ロレンソ了斉」のことで、彼は、
1551年山口でフランシスコザビエルから、
キリスト教を教えられ、信じて洗礼を受
けました。平家物語を語って家々を回り、
門付けをして暮らしていたのが、福音を
伝える人と変えられ、ザビエルや他の宣
教師の通訳もするようになりました。ザ
ビエルが2年3ヶ月で日本を去った後、
ロレンソは他の宣教師と共に大いに働
きました。

当時、日本の著名な教育の場であり、都
の政治に絶対的支配権を持っている仏教
の大本山比叡山に乗り込み、心海上人とい
う高僧らと語り合うこともしました。また、
織田信長や豊臣秀吉に何回も謁見し、足
利将軍や、戦国武将たちにもキリスト教
を伝え、日本キリシタン史上最大の影
響を与えました。彼が信仰に導いた人が、
7000名もいたことから、彼の人柄と働
きの素晴ら

しさがわかります。

当時四條畷市と大東市にまたがる飯盛
山城には、最も力のある武将、三好長慶
が近畿・四国一带を治めていました。こ
のころ比叡山延暦寺を中心とした仏教
勢力が宣教師やキリシタンを排斥する
運動を起こしました。中心人物は三好
長慶の家臣で、下克上を行った代表的
人物で奈良に住む、松永久秀でした。
彼は3人の論客を選びました。

①結城山城守忠正(ゆうきやましろのか
みただまさ)一剣術家・書家で天文学
にも通じた人

②清原外記枝賢(きよはらのげきしげか
た)一公家で和漢の諸学に秀で、祖父
が吉田振動の大成者、吉田兼俱

③高山飛驒守厨書(たかやまひだのか
みずしよ)一高山右近の父

この時、偶然松永久秀に訴え事をする
ため、ディオゴ結城というキリシタン
の信者が来ていました。結城忠正はキ
リスト教の予備知識を得ようとして
ディオゴに話しかけたところ、忠正が
出したすべての疑問に対して、完全
に満足する答えが返ってきて、忠正
は驚き、讃嘆の言葉を発し続け、こ
れはぜひ、宣教師に会ってみたい
と思いました。そして、やってきた
のがロレンソ了斉でした。

彼は、外見上は、こわい容
貌で貧しい装いであったけれど、
人並みすぐれた知識と才能と
記憶力で、豊富な言葉を自由
に操り、その言葉にはユーモア
があり、明快かつ思慮にとんで
いたので、3人は驚嘆しました。
こうして、2日2晩、集中して
学び、その

場で洗礼を受ける決心をしました。父と共に来ていた、結城左衛門尉(ゆうきさえものじょう)(アンタン)も父とともに洗礼を受けました。

結城アンタンは、飯盛山城下の岡山城の城主で三好長慶に仕えていましたが、受洗した喜びとゼウスの素晴らしさを誰にでも情熱的に語ったので、同僚たちはアンタンを満足させてやろうと修道士を呼ぶことになり、やってきたのがロレンソ了斎でした。

武将たちは、初めは好奇心から集まったのですが、話を聞くうちに初めと違う考えを抱き、昼夜の別なく討論は行われ、集まった武将 73 名全員が洗礼を受けることになり、河内は近畿におけるキリシタン活動の中心になりました。(つづく)



「ドイツのクリスマス風物詩」

神戸教会牧師 松本義宣

夕方4時には夜の帳につつまれるドイツの真冬。その楽しみは、どんな小さな町でも開催される「ヴァイナハツ・マルクト(クリスマス市場)」です。12月初旬から年末まで、町の中心(多くは市役所前広場)で連日連夜開かれます。小型のブース(小屋)が並び、お菓子やケーキ類を始め、様々なクリスマスグッズが販売されます。子供向けには移動ミニ遊園地(トレーラーの荷台がメリーゴーランドに早変わり!)も登場し、広場の真ん中には生木のもみの木、その下には柵がめぐらされた「聖家族」の小屋。びっくりは、この囲いには本物の(生きた!)羊や山羊が放し飼いになっていて、25日には赤ちゃんイエス様(こっちは人形!)が飼葉桶に寝かされます。厳しい寒気の中、この時期ならではの名物、湯気の立つグリュンヴァイン(香料の効いた甘いホット・ワイン)をすすり、カルトツフェル・プファー(じゃがいもパンケーキ)をほおばり、出店をひやかしつつ、特設舞台の日替わり出演の合唱や器楽演奏に耳を傾けるのは、この季節ならではの日課です。

24~26日は三連休、家族団欒の内にクリスマスを迎えます。イヴの日には、私が働いた教会では、夕方4時から堅信教育中の青少年のページェントによる礼拝、6時は正統的な説教礼拝、夜半11時からはキャンドル・サービスで聖歌隊も盛大に賛美。この日だけは、普段は閑古鳥の礼拝も(悲しいことに事実です!)通勤電車並の超満員。そして鐘の音が響く暗闇の中、静寂の雪道を家路につきます。25日は聖降誕日礼拝、ラッパ隊や聖歌隊も出演しますが、普段の人数の礼拝で昨夜の喧騒が嘘のよう。26日、本来は降誕日第二礼拝の日ですが、もはや真面目に礼拝を守る教会は少ないのかもしれませんが。ただ、この日は「殉教者ステファノの日」でもあります。たまたま、私の奉職した教会が「聖ステファノ教会」という名前だったので?この日も記念礼拝がありました。・・・

静かで穏やかなクリスマス、まさに賛美歌 *Stille Nacht, Heilige Nacht* (「きよしこの夜」=静かな聖夜)です。つまり、いわばドイツのクリスマスは、日本の「お正月

